

才 能

1. 教育を考える一言

「学習者の才能と創造力を信じなさい」—V.A.スホムリンスキー

2. 背景

スホムリンスキー（В.О.Сухомлинський, 1918-1970）は、ウクライナ・ソ連の著名な教師及び教育学者である。

「才能」の定義には、「ある物事をうまくなしとげる、優れた能力」（『明鏡国語辞典』、大修館）、「物事を巧みになしうる生まれつきの能力。才知の働き」（『大辞泉』、小学館）などがある。「才能」という言葉の意味は、辞書の定義でも統一されていないため、その意味に関する考え方は、以下のように大きく二つに分かれている。①子どもは誰でも才能がある。ほとんどの子どもは、適切な環境が整っていれば、その才能を発展させることができる。②才能のある子どもは非常に少ない。子どもにある才能より、才能のある子どもを捜さなければならない。

3. 考察

才能について考えるとき、まず、天才とは分けて考えたほうがよいだろう。「天才」は「生まれつき具わっている、並み外れてすぐれた才能」。そして「才能」は、「生まれつきの能力」である。つまり、天才は少ないが、才能は誰にでもあるものと考えられる。

人間は、発達にともなって、それぞれに高次神経活動の特徴を取得する。その特徴は、人間の性格や能力に影響を与える。従って、人間は、感覚、感知、思考、記憶、想像力の特徴をなしていて、独特の興味、嗜好、能力、気性、性格がある。人間は一人ひとりがユニークであり、自分なりの長所が誰にでも必ずある。

しかし、子どもの嗜好、能力、気性、才能などは、すぐには発見されない場合が多い。アメリカの心理学者であるポール・トーランス（E.P.Torrance）は、学校で成績不良と評価される子どもにも、才能のある子は多いという。このような子どもは発達が早く、授業で非創造的な活動をするとき教師にたてつくことがあり、適切に評価されない。また、才能のある子どもは、自分だけが他の同級生と違わないために、自分の才能や特長を隠すという場合も考えられる。

教師は、子どもはみんな違うと理解し、子どもの才能を見つけ、発展させるべきであると考ええる。

参考文献

- ・ E.P.Torrance, D.A.Sisk, "Gifted and Talented Children in the Regular Classroom", Creative Education Foundation Press, 1997（邦訳：野津良夫訳『才能を拓く—その考え方・見つけ方・伸ばし方』文芸、2000年）
- ・ スホムリンスキー（川野辺敏訳）『子どもを信頼しよう』新読書社、1974